

癡達の凸凹

癡達障害を抱えながら独居生活を送る叔父の日常を
癡達障害と診断された映画監督が撮り続けた三年間

精神に不調をきたした映画監督/坪田義史が親族に相談したところ、
広汎性発達障害を持ちながら一人暮らしをする叔父さん(まことさん)がいることを知る。
坪田は衝動的にカメラを持ってまことさんに会いに行く。
坪田はまことさんとの交流を深めていく中で、「親亡き後の障害者の自立の困難さ」や
「障害者の自己決定や意思決定の尊重」「8050問題に伴う住居課題」などの問題に直面していく。



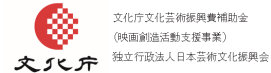
まことさんと出会ってから約三年の月日があっという間に過ぎました。こだわりが強く偏った僕の視線は、まことさんのどこまでも純粹な感性に触れ、フレームに収まりきれないありのままの姿に惹かれました。まことさんを撮りたい。当時、鬱や不眠に悩み、精神科を受診して注意欠如多動性障害と診断を受け、破れかぶれの状態で撮影に及ぶ僕を、まことさんは「義史さん」と呼び、穏やかな表情で受け入れてくれました。取材を終えた別れ際の玄関先では、必ず「またね」と言って自ら手を差し出して握手をしてくれるまことさん。本作『だってしょうがないじゃない』は、被写体のまことさんの協力なしでは、成立しえなかった作品です。僕は、これからも、まことさんに会いに行きます。

—— 監督 坪田義史

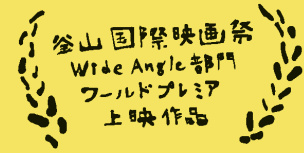
出演:大原 信、坪田 義史、木村 真智子、木村 義典、坪田 達義、坪田 洋子、坪田 正子、間 美穂、三澤 恵子、大塚 健二、岩瀬 一郎、幸島 重、長岡 由佳、柴田 治生、関根 幹司
プロデューサー: 柏田 洋平 制作プロデューサー: 池田 将
制作: 早坂 大知、バロン・グループ 撮影: 坪田 義史、池田 将、和島 香太郎 編集: 和島 香太郎 編集協力: 柏原 拓哉 音楽: 宇波 拓 アニメーション: つのぶみ 音響: 今村 志朗 英語字幕: 高岡 裕子、石井 美和 字幕監修: SasaMarie
メインビジュアル提供: 篠田 太郎、MISA SHIN GALLERY 宣伝美術: 原田 光彦 宣伝協力: きつね802、洋野、伊藤 尚哉 製作・宣伝・配給: サンティ株式会社 監督: 坪田 義史

公式サイト | <https://datte-movie.com>
 @dattemovie
 @datte_movie

詳しくは映画公式サイトをご覧ください。下記配給会社までお問い合わせください。
 配給: サンティ株式会社 Tel. 03-6380-5461



ドキュメンタリー映画



本邦版にはバリアフリー字幕が付いています
 2019 JAPAN 119min CoLoR DCP& Blue-ray

幸福というものを求めて、前に前にと歩んできた僕らは、
もしかしたらとつにその場所を通り過ぎていたのかもしれない。
この映画を観て、何故だかそう思った。

リリー・フランキー

誰かを撮影したいと思い、カメラを向けることは、それがどんな相手であってもある種の愛の行為であると私は思う。

その笑顔に魅せられて「彼の見る世界を知りたくなった」と人間味に満ちた友情の物語が紡がれてゆくが、ふと物語が消え、カメラが立ち尽くし、黙ってただ彼を見つめるしかない瞬間が何度も到来する。その時カメラが発見しているのは決して語ることでできない何かである。

カメラは語るのではなく、ただすべてを肯定するのだ。そしてその何かが知らぬ間に成長し、ドキュメンタリーとかフィクションも関係なく、信じがたい純粋なイメージとなって立ち上がる瞬間が訪れる。まことさんはひとりである。そしてまことさんはひとりではない。そのことを私たちは知る。

それは恐ろしくも美しい映画の結晶のような瞬間だった。

諏訪敦彦 (映画監督)

発達障害とされる人たちは、ゆっくりゆっくりと自分のペースで発達する人たちだ。
慌ただしいスピード社会からはじき飛ばされて困っている。植物は引っ張っても伸びない。
サンサンと照る太陽の光と、適量な水と、根を張る大地とが必要なだけだ。

植物原理で生きる人たちも、光と水と土地を求めている。

儀式のような日々の暮らしは、社会の歪みのバランスをとる神事のように見えた。

わたしたちはその神事に参加できているだろうか。

稲葉俊郎 (東京大学医学部付属病院 循環器内科 助教)

淡々とした一見「普通」の日常でも、全員が全員、見ている世界が同じなわけではない。
広汎性発達障害のあるまことさんの、私には見えていない世界が、ほんの少し垣間見えた気がする。

本作品ではまことさんが毎日入浴しなかったり、洗濯をしなかったりすることを監督が聞いたです場面があるが、もしかするとそれは、我々が洗脳されているだけなのではないか、必用以上に「普通」にとらわれ過ぎているのではないかと考えさせられた。

姫野 桂 (フリーライター)

慎重に繰り返される自己身体やモノとの微調整が「こだわりが強い」と呼ばれてしまうこと。

その微調整の積み重ねがいっぱい詰まった、ささやかな生活習慣と環境から引きはがされる不安と痛み。

それらは“自閉症”とされる人間に限った特徴ではなく、多かれ少なかれ誰もが持つ感覚であることを、「まことさん」の日常を繊細に伝えるこの作品を通して、多くの“健常者”が気づかされることだろう。

綾屋紗月 (自閉スペクトラム症者・東京大学先端科学技術研究センター特任研究員・
おとえもじて (発達障害者が運営・参加する当事者研究会) 代表)



見終わった瞬間、これからまことさんはどうするんだろう、どうなるんだろうと、
他人事でなく心配になりました。映画のリアルと私自身の日々の現実がシンクロしたんです。

谷川俊太郎 (詩人)

この題材で映画として成立するのか。そう危ぶみながら観た。杞憂だった。目を離せない。
でもラスト近く、撮る側の意図が透けて見え始めた。作品の危うさとエゴと被写体への加害性。

同業者として正視はつらい。目をそむけなくなる。あなたにはそれも含めて観てほしい。

森 達也 (映画監督・作家)

観ているうちに、主人公のまことさんに対する尊敬の念が芽生えてくるとともに、「障害って何だろう?」と改めて考えさせられる作品です。

わたしたちは「常識」なんてつまらない概念を捨てるべきときに来ていると思うのです。

作品の中で、まことさんと坪田監督が「幸せになりたい」と願う場面がありますが……

「じゅうぶん、幸せそうですけど!」って叫びたいです!

栗栖良依 (SLOW LABEL ディレクター)

発達障害を持つ“おじさん”を見つめ続ける監督の目は、ゆったりと優しい。

ありのまま存在を肯定する眼差しだ。カメラは時として人の営みを搾取し傷ける。

けれどもカメラは人に寄り添う事の出来る眼差しでもあると知らされる。

おじさんに向けられた眼差しは、そこに監督自身を投影し、自らを知る探求にも進む。

映像を見つめる私たちは、これまで他者にどんな眼差しを向けてきたのだろう。

そしてどんな眼差しを求めてきたのだろう。

渡辺 篤 (現代美術家)

どうしたんだよ坪田さん! もっと傲慢で吐き気するくらいの露悪的な映画にすりゃあいじゃない!

「だってしょうがないじゃない」って何よ! 言い訳がましい事やらんでよ! 続編観たいよ坪田さん、…。

映画を観終わり消化できないモヤモヤした感情とやるせなさが噴出してから、ふと思う。
坪田さんやまことさんと同じように宿題だらけの自分の家族のことや親族のこと、社会のこと。
むむ、なんだか色んなことを考えさせられちゃうな。

畜生! 坪田さんよ! これがあんたのやり方かよ! 畜生め! しょうがねえからもう一度観る!

松浦祐也 (俳優)

身の回りの事々を執り行うまことさんの一つ一つの所作の美しさ、確かさに、まことさん自身が在り、お母さんが在る。

まことさんの存在は、かつてお母さんの日々のよすがでありつづけ、そして、今は、生きづらさを抱えた監督さんの創造のよすがとなる。

世の中捨てたもんじゃないなと思う。まことさんと監督さんの「しあわせ」を、二人とともに、星に願う。

原 美樹子 (写真家)